平重盛（たいらのしげもり）について

時代:　　平安時代末期
生年月日:　1138 年（保延 4 年）
死没:　　1179 年（知承 3 年）9 月 2 日（満 41 歳没）
別名:　　小松内大臣、小松殿、灯篭大臣
官位:　　大納言、内大臣
父母:　　平清盛、高階基章娘
人柄:　　父・清盛の後継者と目されていたが、若くして病死する。
　　温和な性格で気配りがあり、平家の良識派といわれ、父・清盛でさえ一目おく武将でした。

平重盛（たいらのしげもり）は保元（ほうげん）・平治の乱で若き武将として父清盛を助けて相次いで戦功を上げます。
平治元年（西暦 1159 年）平治の乱の勃発のとき、清盛は熊野参詣のため紀伊にいました。
急ぎ京都に戻った清盛は、二条天皇と後白河上皇を救い出し、藤原信頼（ふじわらののぶより）・源義朝（みなもとのよしとも）の追討宣旨（ついとうせんじ・敵を討つ天皇の命）を受けます。平重盛は叔父・頼盛（よりもり）とともに出陣します。この戦いでも重盛は【年号は平治、都は平安、我らは平氏、三つ同じ[平]だ、ならば敵を平らげよう】と見方の士気を鼓舞し、自ら獅子奮迅の活躍をします。平氏軍は藤原信頼・源義朝軍を敗り源氏方は敗北しました。藤原信頼は斬罪（ざんざい・打ち首）、源義朝は尾張で殺されます。以後、平氏の政権が誕生しします。平治 9 年（西暦 1167 年）清盛は太政大臣となります。
重盛は父・清盛の立身とともに累進し、最終的には左近衛大将（さこんえのだいしょう）、正二位内大臣（しょうにい・ないだいじん）にまで出世します。

しかし、重盛は清盛の嫡男ではあったが、正妻の時子の子である宗盛や徳子とは母が異なり、有力な外戚（がいせき）の庇護（ひご）はなく、室が藤原成親（ふじわらのなりちか）の妹・経子であったため、成親（なりちか）の失脚後は一門のなかでは孤立気味であったといわれます。
鹿ヶ谷（ししがたに）事件の際には清盛の後白河法皇（ごしらかわほうこう）幽閉（ゆうへい）を身をもって制止するなど、政治的には後白河法皇に近い立場でした。清盛の後継者と期待されながらも、清盛と後白河法皇の対立では、有効な対策をとることができないまま、父に先立ち病死しました。
六波羅小松谷に居を構えていたことから、小松殿ないし小松内大臣ともいわれ、またその邸宅に 48 の灯篭を建てていたことから灯篭大臣とも称されていました。

【平治の乱】
保元の乱後、平治元年（西暦 1159 年）12 月、京都に勃発した内乱で、後白河上皇をめぐって藤原通憲（ふじわらのみちのり）と藤原信頼（ふじわらののぶより）とが反目し、通憲は平清盛と、信頼は源義朝（みなもとよしとも）とが組んだ源平武士団の対立に結びつき、藤原信頼と源義朝は、平清盛が熊野参詣中に挙兵し、上皇を幽閉し、藤原通憲を殺害した事件です。

急ぎ京都に戻った清盛は、二条天皇を内裏（だいり・皇居）から六波羅に脱出させ、藤原信頼・源義朝を敗り、藤原信頼は斬罪、源義朝は尾張で殺されるが、義朝の子・頼朝（よりとも）も伊豆に流され、義経は京の鞍馬寺へ預けられます。これにより源氏は一時哀退します。平治 9 年（西暦 1167 年）清盛は太政大臣となり、平氏は全盛をきわめることになります。

【鹿ヶ谷（ししがたに）事件】
後白河法皇の近臣（きんしん）らが、平家一門を追放しようとする陰謀が発覚した事件です。
その事件後、父清盛が後白河法皇を幽閉（ゆうへい・牢などに閉じ込めること）しようとするのを、重盛が[（君に）**忠ならんと欲すれば孝ならず**、（親に）**孝ならんと欲すれば忠ならず**]と嘆いて、清盛をいさめ（目上の人に忠告すること）たと言われる話は有名です。

重盛は、わがままな清盛とは対照的に、道理をわきまえた人物であったようです。それだけに、法皇幽閉を命じられた重盛は深く悩みます。
重盛は、清盛の子である。それと同時に、後白河法皇の臣下でもある。
忠誠と孝行のどちらを選ぶべきか。
悩みに悩んだ末、重盛は父・清盛に訴えます。

重盛は、
[恩を知ってこそ人といえるので、知らないものは、鳥やけだものと同じです。
恩の中でも、一番重いのは君の御恩です。
まして、わが家は、桓武天皇の御末でありながら、中頃たいへん衰えていたところ、
父上になって、大いに立身出世せられ、われわれの様なおろかものまでもが、高い官位を頂いているのは、
これ全く君の御恩ではありませんか。
今、この御恩を忘れて、天皇の御威光をかろんじ申すようなことがあっては、たちまち神罰を受けて、
一族はやがて滅びてしまうでしょう。
それでも、なお、父上がお聞き入れなさらないなら、私は、兵を率いて法皇をお守りせねばなりません。
しかしまた、父上に手向かうことも、子として私には堪えられません。
それ故、父上がどうしてもこの企てを成し遂げようとなさるなら、まず私の首をはねてからにして下さい。]
と、真心込めて諫めたので、さすがの清盛も、しばらくは、思いとどまるようになります。

[　]内の文章は、戦前の【尋常小学国史】からの引用です。

このような忠と孝のジレンマのなかで、どのように振舞えばいいのか、それを戦前の教科書では、重盛の逸話を通じて教えられました。

教育勅語にも言う。
[君に忠、国家には愛国心、親には孝、夫婦相和し、朋友相信じ、友だちには友情を持て]と。
しかし、教育改革において、軍国主義に抵触するとのことで、戦後の教科書から平重盛は姿を消し、
教育勅語は廃止になります。

重盛に対する同時代の評価は、
[かくの如きのとき、必ず使を送られ、殊（こと）に芳心（ほうしん・親切な心）を致（いた）されるなり]（山槐記）、
[いみじく心うるはしく]（愚管抄）、【いみじく】非常にの意。【うるはし】立派の意。
[武勇時輩（ぶゆうじはい）にすぐると雖（いえど）も、心懆（しんそう）甚（はなは）だ、穏（おだやか）やかなり]（百錬抄）
など好意的なものが多く、優れた武人であると同時に温和で気配りのできる人物だった様です。

その温厚・誠実な人柄で、後白河の信任も厚く、[平家物語]において平家一門の良識派的な存在とされていることも、その人柄が後世に伝わっていたことによると思われます。
しかし、清盛と後白河の間に立たされた重盛は、平氏の棟梁とはいっても、全権を掌握（しょうあく）していたわけではありませんでした。みずからの意思を封じ込め、調整役に回らざるを得ない立場が、彼の温厚な性格を形成したと思われます。

その性格は努力と自己抑制による後天的なものと思われます。
保元・平治の乱での、勇猛（ゆうもう）で生き生きとした姿は影を潜（ひそ）めるが、鹿ヶ谷事件を見ると、激しい感情を心の底に隠していたと考えられます。

その時につぶやいたと言われる言葉が
【（君に）忠ならんと欲すれば孝ならず、（親に）孝ならんと欲すれば忠ならず】（日本外史）です。
清盛と後白河の対立の中で、自分が無力であった状況が感じ取れます。

重盛の母は身分が低かったため、支えてくれる有力な親族をもたず、同母の弟の基盛（もともり）が早く死去していたことも、重盛の孤立感を深めたと推測されます。

重盛の死は、清盛と後白河法皇の対立を抑（おさ）えていた、最後の歯止めが失われたことを意味し、
両者の同盟関係を完全に崩壊させることになります。

平重盛を祭る祠（ほこら）・神社は日本各地にあります。小松の名前を使った神社、寺、地名が多いようです。
重盛の人柄が偲ばれます。